

陶芸教室のビデオ分析

小林 美保

0.はじめに

T県N市O町の産業には、水瓶や大型陶器で知られている窯業（焼き物づくり）がある。この焼き物づくりは200年の伝統がある。O町にある窯元は観光の名所ともなっており、作陶見学や陶芸体験が楽しめる。そこで陶芸体験をする者と陶芸を教える者との間で行われる行為をビデオ分析し、陶芸教室における体験学習とは何か、陶芸の持つ陶芸らしさとはどのようなところにあるのか、見ていきたい。

1.調査概要

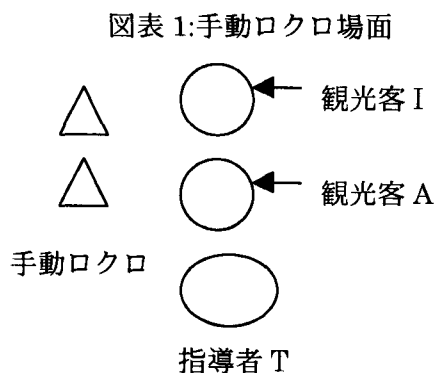
2000年8月17日にT陶器にお願い状を持って挨拶に行き、調査協力をお願いしたところ、許可していただいたので、9月10日にビデオ撮影を行った。

陶芸教室には2種類ある。1つは1ヶ月に4回陶芸教室に通うことで技術を学べるという「一般コース」、もう1つは観光客向けの「観光陶芸体験コース」である。私たちは後者の「観光陶芸体験コース」でビデオ撮影を行った。陶芸教室は展示場（焼き物などを売っている場所）に隣接している。陶芸を教えてくれるTさん、職人のKさん他、数名のスタッフがいる。この日は私たちの他にも、「一般コース」の生徒さんが1名陶器を作りに来ていた。まず、観光客A（以下A）と観光客I（以下I）が陶芸体験を行った。AとIは手動ロクロで陶器作りをした。Aは調味料入れ（かたくち）を、Iは茶碗を作った。次に調査協力者のYが電動ロクロで陶器作りをした。Yは花瓶を作った。KとIが手動ロクロで陶芸を行う際には、正面からカメラ2で、横からカメラ4で、右側からカメラ3の計3台でビデオ撮影を行った。なおYが電動ロクロで陶芸を行う際には、正面からカメラ2（職人のKさんとYが映るように）、同じく正面からカメラ4（Yのみ）、横側からカメラ3を用いてビデオ撮影をした。

2.データ分析

2-1.手動ロクロ場面において

手動ロクロは以下のような状況で行われている。



IとAは隣り合って手動ロクロ作業をしている。TはそれをAの横側から見る、というような状態である。なお、この陶芸教室全体の間取りは左の図表1のようである。体験学習ということもあり、指導者は必要な際に助言するが、つきっきりで指導しているわけではない。観光客は自分の思うように、自由に作品を作ることができる。なお手動ロクロの製作工程は以下の通りである。（図表2）

図表 2:手動ロクロの製作工程 (ひも作り)

1. 底の部分を作る。
2. 粘土を適量とって、両手をこすり合わせてひも状にする。
3. 底の部分にくっつけていく。ここで大事なのはまずひもを人指し指 (中指) で底の部分の粘土をひものところまで上げてくること。
4. さらに上へ積み上げていく。
5. まだ高さができていないうちに内側の表面をスポンジなどでなめらかにしていく。
6. どんどん積んで形を作り完成。底を削って出来上がり。最後に自分の名前を入れましょう。

資料:[寺元陶房、2001]に依拠した。

以上のようなことを踏まえた上で、断片 1 を見ていく。

断片 1 は A が作った作品を、T が形を整えていく場面である。しかし T が手を加えていくに従って A の思っていたような作品と異なってくる。そこで A が T に不満を述べる場面である。

【断片 1】カメラ 4 0:37'48"~0:38'34"

1	T	<u>小さい版だったんやね::</u>	<u>ちょっとしましょか::</u>
2	A:	①	② そ::実は: (えっ) できる
3	T:	(2.0) <u>そんな風に小さくはなりませんけど::</u>	
4	A:	③ んですか hhhh	はい (0.1) すみません

1 行目の T の発話「小さい版だったんやね」(下線部①) の語尾 (~やね) は、相手の意思を確認する言葉である。もっと小さいものを作るはずだったと不満を言われた T はこのように、客である A の意思を確認していることが分かる。それに対して A も T の意思確認に答えている。ここでは指導者が意思確認をする→観光客が答えるという形で会話が成り立っている。次に「ちょっとしましょか」という発話 (下線部②) が起こっている。この発話は、A の意思にそのような形に作り変えようという提案である。それに対して A は「できるんですか」と答えている。この A の発話は、T が「ちょっとしましょか」と提案したことに対する合意だと見て取れる。ここでは指導者が提案をする→観光客が合意するという形で会話が成り立っている。また 4 行目の「そんな風に小さくはなりませんけど」(下線部③) という発話だが、これは「ちょっとしましょか」(下線部②) に対する忠告である。「そんな風に」とは、A が考えていたようにという意味であり、下線部②において形を作り変えようと提案をしたが、それには限界があることを忠告しているのである。それに対して A は「はいすみません」と了承したことを表示している。ここでは指導者が忠告→観光客が了承するということが見られる。このように陶芸体験の場においては、指導者が観光客の意思を確認したり、提案をすることで指導者自らの意見を述べる。観光客もまた指導者の意見に合意したり、了承したり、不満を述べたりすることで自らの意見を述べ

る。お互いが意見を言い合い、「指導者—指導される者」との間に不満→意思確認、提案→合意、忠告→了承というような流れが組み込まれて陶芸体験という場が協同的に成り立っているのである。

手動ロクロでは、図表 2「手動ロクロ製作工程」に沿って製作が進められる。指導者が観光客に助言をすることはもちろん、時には製作工程の一部を手伝ったり、少し手を貸したりすることがある。上の断片 1 は、まさに指導者が観光客の手伝いをしている場面である。しかし指導者は、作品の全てに手を加えるわけではない。あくまでも観光客の作品を手伝うのであって、主たる製作者は観光客自身なのである。そのため指導者は手伝いが終わると、観光客に作品を引き渡さなければならない。次の断片 2 は、断片 1 に続く場面で、指導者が手伝い終わって、観光客にその作品を引き渡す場面である。

【断片 2】カメラ 4 0:38'51"~0:39'15"

6. T: はい 一応こうね::なってますので:: 底の 1cm はこちらで削りますから
①

7. A: 【うなずく】
②

8. T: 気にしないでください ここから上にサインかマークを
【K の作品を触る】

9. A: 【うなずく】 【うなずく】 【うなずく】

10. T: 入れていただきます あと::気になるところはスポンジで直してくだ
③

11. A: く 【うなずく】

12. T: さい はい
④

13. A: はい 【K が自分で作品を制作し始める】

写真 1:手動ロクロ場面において指導者が観光客に指導する場面 (カメラ④)



1行目の「はい」という発話（下線部①）は、Tの手伝いが終了することを示している。これは終了を定式化している。そして先ほど述べたように、この作品に対する権限はAにあることから、「一応こうね::なってますので」とAに了承を得ようとしている。それに対してAがうなずいている（下線部②）ことから、Tの手伝った工程について了承をしていることが見てとれる。その後の発話は、これからAが製作するに当たって行うべき工程を説明したものである。TはAが製作をするに当たり、どのようなことに注意をして製作を行えばよいのか、丁寧に説明をしている。Tが説明するという行為は、Aに対する指導である。ここでは口頭によってAへの指導がなされている。口頭での説明は言語を発することから、音声的なレベルの情報伝達手段だと言える。ここでは音声的レベルの情報伝達手段で指導が行われており、これらの指導にもAがしきりにうなずいていることから、口頭で指導するという音声的レベルでの情報伝達手段によって、十分コミュニケーションが取れているのである。下線部③では、Tが「あと」という言葉を発している。この「あと」という言葉は、Tが述べる注意が終わろうとしていることの表示である。TはAへの注意を終わらせようとしているので、ここでもまた終了を定式化することが起こっている。それに対してAは「はい」と受け入れを示している。その発話を受けてTも「はい」とリピートしている（下線部④）。このTの発話「はい」の後にすぐAが自分の作品製作に戻っていることから、もう一度①で行ったTの手伝いが終わったことを示しているのである。

写真 2: 手動ロクロ場面で指導者の指導終了後、観光客が作品製作をする場面（カメラ④）

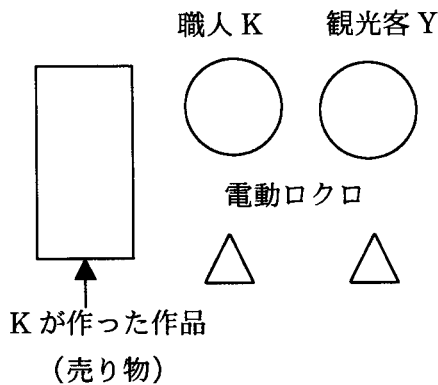


このように手動ロクロ場面で見られたことは、「指導者—指導される者」との流れが組み込まれて、陶芸体験の場が協同的に成り立っているということである。また終了を表す語句の後では、これからやるべき制作工程が音声的レベルのコミュニケーションで十分指導できているということも分かる。

2-2.電動ロクロ場面において

陶芸教室では電動ロクロを使って陶芸体験をすることもできる。ではこの場面においてどのような行為が行われているのか、見ていくことにする。なお、電動ロクロ場面における簡単な配置図&説明は以下の通りである。

図表 3: 電動ロクロ場面 I



左の図表 3 にも見られるように、職人 K と観光客 Y は並んで電動ロクロを使用している。K は Y の隣で売り物の陶器を作っている。これは K の仕事であり、K の左側には K が作った作品の数々が並べられている。なお、Y は自分の作品を作るのに専念している。電動ロクロの制作工程は図表 4 のとおりである。

図表 4: 電動ロクロの製作工程

1. ロクロの中央に粘土を据える。
2. 中央になじませるため繰り返し粘土を引き上げ、引き下げる。引き上げる際は粘土の下の方から両手で挟んで徐々に上へ引き上げる。引き下げる時は少し向こう側へ倒しこむようにする。
3. 親指で上部中央を押さえつけて土取りを行う。ロクロの基本は、両手の肘を足などで押さえるようにすること。
4. 徐々に親指とその他の指で土を挟んで上へ引き上げる。大きなものは左右の手で引き上げる。最後に底を糸で削る。

資料:[素人の陶芸、2001]に依拠した。

以上のことを踏まえた上で分析に入りたい。

陶芸教室においては、観光客自身が作品を作ることはもちろんだが、しばしば指導者が手を貸したり、製作工程の一部を手伝ったりする場面が見られる。断片 3 では観光客 Y の作品に対し、K が手を貸す場面を示す。K は自分の仕事である売り物の陶器を作っていたが、Y の作品のことを気に掛けている。Y は自分の作品を作るのに専念している。

1 行目で K が「それ:」と言いながら立ち上がろうとしている。(下線部①)その前に K が Y の作品を見ていたことから、K の言う「それ」が指すものは Y の作品であることが分かる。K が Y の作品のことを言いながら立ち上がるということは、K が Y の作品に何らかの形で関与しようとしているのである。2 秒後に Y も K を見ていることから、そのことに Y 自身も気が付いている。さらにその後の「広がりすぎよんやな」(下線部②)という発話は、Y の作品の現状を示す言葉である。その 2 秒後に Y が作品を作り直そうとしていることから、「広がりすぎよんやな」は Y への助言だと理解できる。Y はその助言を受け入れ

て、自分自身で作品を作り直そうとしているのである。次に K は 3 行目で「ちょっと」と

【断片 3】カメラ 2 0:25'54"~0:26'11"

- | | | | |
|-------|-----------------|-------|------------------------------|
| 1. K: | <u>(2.0)それ:</u> | (2.0) | <u>広がりすぎよ</u> |
| | ① | | ② |
| 2. Y: | (4.0)【Y の作品を見る】 | | 【立ち上がろうとする】 |
| | | | 【K を見る】 |
| 3. K: | <u>んやな</u> | (2.0) | <u>ちょっと ()</u> |
| | | | ③ |
| | | | 【Y の方へ行こうと一歩踏み出す】 |
| 4. Y: | | | 【自分の作品を作り直そうとする】 |
| 5. K: | | (4.0) | 【Y の座っていた場所に座り、代わりに作品に手を加える】 |
| 6. Y: | | | 【場所を空ける】 |

写真 3:電動ロクロ場面において指導者が製作工程の一部を手伝う場面 (カメラ④)



言いながら Y の方へ一歩、足を出した。(下線部③) K が助言をしたことに対し、作品を助言通りに作り直すという Y の行為は、何ら問題がない。しかし、ここでは Y が作り直そうとしたことに対し、K が「ちょっと」と口を挟んでいる。Y の行為は、K には受け入れられないことなのである。「ちょっと」かつ足を一歩 Y の方へ踏み出す行為は、Y が作品を作り直すことを受け入れないという表示なのである。Y もまた K の「ちょっと」の表示の意味を理解したからこそ、6 行目で場所を空けているのである。そして、K は助言ではなく、自らが手を加えるという形で Y の作品に関与した。これは先の手動ロクロ場面とは異なる。手動ロクロ場面においては、指導者と指導される者との間で不満→意思確認、提案→合意などの流れが成り立っていた。しかし断片 3 の電動ロクロ場面では、指導者と指

導される者との間で交わされる流れが食い違っている。K が助言をして、その助言通りに Y が作品を作り直すことを K が「ちょっと」(下線部③) という発話で受け入れていないのである。電動ロクロ場面では手動ロクロ場面と違い、「指導者-指導される者」との間に成立する流れが指導者に受け入れられないということが起こる。これは手動ロクロ場面とは明らかに違う。電動ロクロ場面では、助言→助言通りの行為に加えて新たに指導者が受け入れないという流れが成立する。これは電動ロクロ場面に特有な流れであり、この流れを組み込むことで電動ロクロ場面が達成されているのである。

陶芸教室では指導者が助言をするだけでなく、製作工程の一部を手伝ったり、少し手を貸したりすることが見られる。陶芸教室は体験学習という形を取っていることから、指導者はあくまでも製作工程(図表4)の一部の手伝いをしているのであって、作品自体は観光客が作らなければならない。だから指導者は手伝い終わると、観光客に作品を作らせるのである。断片3は、指導者が製作工程の一部を手伝いに来た場面であった。では手伝いが終わり、もう一度観光客に作品を任せる場面はどのようなものだろうか。次の断片4を見てみる。

【断片4】カメラ3 11:53'45"~11:54'04"

- | | | | |
|--------|----------|-------------|--------------|
| 7. K: | コツはな | 筒ばかり作ってな | 何百個も壊さんと:: |
| | ① | | |
| 8. Y: | | | 【足を上げて立ち上がる】 |
| | 【うなづく】 | | 【大きくうなづく】 |
| | | | ② |
| 9. K: | 土管づくり | 土管ばかり作りよった: | |
| | ③ | | |
| とする] | | 【立ち上がる】 | 【席を空けて移動】 |
| 10. Y: | | 土管づくり | |
| | | ④ | |
| 11. K: | 私も:: | | |
| | | 【自分の場所へ戻る】 | |
| 12. Y: | ほ:: | そこまでやないと:: | |
| | 【首を横に振る】 | | 【Yが自分の場所に戻る】 |

写真4:電動ロクロ場面で指導者の手伝いが終了後、観光客が製作する場面(カメラ④)

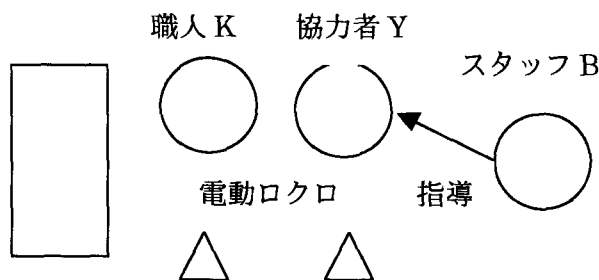


断片4の1行目では、Kが電動ロクロを使うコツについて言及している。(下線部①)7行目の最初に「コツはな」という発話がある。これはKがYの製作工程の手伝いをするという行為の終了を意味している。「コツはな」という発話は、自分の手伝いの終了を定式化しているものである。下線部①のKの発話「筒ばかりつくってな 何百個も壊さんと」は、そのような経験を積まないと出来るようにはならないのだとYに表示している発話である。この点においては手動ロクロ場面でも断片4の場面と似ているところがあった。(手動ロクロ場面の断片2では、指導者の手伝いの終了を表す発話「はい」(下線部①)があり、そのあとで指導者の説明がある。)しかしこのあとが異なっている。この断片4では指導者が助言を行っているが、そのあとの製作工程について説明を行っていないのである。またYはKの助言に対して大きくなずいてはいるが(下線部②)、9行目のKの発話「土管づくり」(下線部③)に対して「土管作り」(下線部④)とリピートをしているのである。このリピートは発話権のパスである。7行目ではKは製作についての説明や指導を行っておらず、助言を終えて立ち上がろうとしていることから、この10行目のYのリピートはKの助言を理解していないという表示なのである。(手動ロクロ場面の断片2では、指導者がこれから行うべき製作工程を説明し、それに対して指導される者は何度もうなづくことで理解を示している。)つまり、手動ロクロ場面では音声的レベルによる情報伝達手段によって、指導することは可能であり、指導される者もそれで理解できる。しかし、電動ロクロ場面では音声的レベルの情報伝達手段によって指導するのは困難であり、指導される者もなかなか理解するのが難しい。

このように電動ロクロ場面において音声的レベルにおける情報伝達手段は少し困難なのである。では電動ロクロ場面においてはどのようにして指導者と指導される者とがコミュニケーションをとっているのだろうか。それを次に示してみる。

次の場面は、職人Kと観光客Yの他にスタッフBが登場する。なお、その配置&説明は以下図表5に見られる通りである。

図表5: 電動ロクロ場面II



KとYは図表5のように隣同士に並んで作業をしている。このときKは自分の仕事を行っており、Yは自分の作品を作っている。電動ロクロの基本がまだうまくできないYのところへスタッフBが現れ、指導をしているところである。

断片5はYと職人K、そしてもう1人のスタッフであるBのやりとりである。スタッフBがYに電動ロクロの基本を教えているところから場面が始まる。BはYに電動ロクロの基本を教えていたが、そばで電動ロクロを巧みに操りながら仕事をこなしているKにも話を振る場面である。

断片5の13行目では、Bが「向こうの人がしよんちよっと見よってみて」(下線部①)とKを指さして言ったことに対し、Yは顔をKの方へ向けている。このようにBの指示通りにYが動いていることから、BとYの間には指導者と指導される者との関係があることが分かる。(これをB-Y関係と表すこととする。)なお指をさすというBの行為によって、Kも指導する側に立たされた。だから14行目でYがKに顔を向けたことでYとKと

【断片5】カメラ4 0:18'24"~0:18'58"		hhhhh
13. B: <u>向こうの人がしよんちよっと見よってみて</u>		②
①	【Kを指差す】	
14. Y:		【顔をKの方へ向ける】
15. K:		お茶碗作るん?
16. B:		
17. Y:	できれば花瓶を::まねをして:同じhh ()	(3.0)ちっちゃく
18. K: 何作るん?	あ::花瓶::	
19. B:	hhhhh	あのこれがね::土をころす:あれが::動作が(1.0)まだ:で
	③	【 <u>手で土をこねるまねをする</u> 】
		④
20. Y:		
21. K: あ::小さい花瓶ね::あ:::もう ()		
22. B: きんのです	hhhhhhhh	
	⑤	
23. Y:	こうして::	
	【 <u>手で土をこねるまねをする</u> 】	
24. K:		あ:::

写真:5 電動ロクロ場面における指導者増員の瞬間(指をさす行為)(カメラ④)



BがKとYとの会話に入ってくる場面である。この際にBはまた笑いを起こしている。Bの視線を見ると、周囲にいる他の人に向かって笑いを起こしていることが分かる。そのあとすぐにK-Y関係の間に割り込もうとしているのだが、トランスクリプト26、27行目の視線からも分かるようにBが話始めた時にはKもYも視線をBに向けていない。実際Bに視線を向けたのが「土をこねる」というところからである。KとYにとってはK-Y関係という「指導者—指導される者」との関係が出来ていたため、Bが割り込んでくることは予想外の出来事だったのである。「土をこねる」のところではYもKも視線をBに向けている。ここで一瞬ではあるがBはまたB-Y関係を復活させ、それに加えて新たなB-K関係（指導者同士の関係）も生み出している。

断片5の22行目においてはまたBの笑いが起きている（下線部⑤）。これは19行目における割り込みと関係が深い。その笑いの直前にYが身振りで土をこねるまねをしている（下線部④）。このYの行為はBの発話を受け入れてKに示しているもので再びK-Y関係に戻そうというものである。このことより、Bの笑いは再びK-Y関係に戻ることへの承認を意味するものである。このように、電動ロクロ場面においては指導者が増員され、その指導者全員で観光客に指導しようとする。これは手動ロクロ場面では見られない光景だった。主たる指導者と副たる指導者との関係（B-Y関係やK-Y関係）、指導者同士の関係（B-K関係）が様々な形で組み合わせられて電動ロクロ場面を作りあげていることが分かる。このような複雑な関係がありつつ、K、B、Yの3人でうまくコミュニケーションをとりながらこの場は成り立っているのである。

また19行目のBの土をこねるまね（下線部④）は、手動ロクロ場面では見られない光景だった。Bは発話をしながら土をこねるまねをしている。手動ロクロ場面では、音声的レベルの情報伝達手段が用いられていた。しかしここでは、音声的レベルの情報伝達手段だけでなく、身振りという身体的レベルの情報伝達も同時に行っている。先の断片4では電動ロクロ場面では音声的レベルの情報伝達手段は困難であると述べた。つまり電動ロクロ場面では、音声的レベルの情報伝達手段に加えて、身体的レベルの情報伝達手段（身振り）を導入することでコミュニケーションをとっているのである。

3. 結論 —手動ロクロ場面と電動ロクロ場面を比較して—

陶芸教室で見られた場面は陶芸教室特有のものであった。手動ロクロ場面では、「指導者—指導される者」との間での流れが手動ロクロ場面を協同的に作り上げていること、指導者と指導される者との間のコミュニケーションは音声的レベルのコミュニケーションで十分成り立っていることがいえる。それに対して電動ロクロ場面では指導者が2人に増員され、そこで行われるコミュニケーションが複雑に組み込まれながら、電動ロクロ場面を協同的に作り上げていること、そして3者間での複雑なコミュニケーションは、音声的レベルのコミュニケーションだけでなく、身振りなどの身体的レベルのコミュニケーションを取り入れながら行われていることがいえる。

私は手動ロクロ場面と電動ロクロ場面を分けて考察し、その違いについて述べてきた。

確かに手動ロクロ場面と電動ロクロ場面は異なる特徴を持っていた。しかしその異なる特徴は、体験学習としては同じ要素である。コミュニケーションの違いがあっても、「指導者—指導される者」の間の流れが違っていても、体験学習としては手動ロクロ場面や電動ロクロ場面で起こっていることは同じなのである。

このように陶芸教室では様々な陶芸教室らしさが見られる。この陶芸教室らしさは体験学習としての陶芸らしさだといえる。体験学習は、陶芸教室場面に見られたように、指導される者が実践することで始めて意味を持つ。あらゆる教育場面において、陶芸教室で見られたような体験学習がますます注目されていくことは間違いないだろう。

【文献表】

- 上野直樹 1999 『仕事の中での学習』 東京大学出版会。
- 申田秀也 1995 「トピック性と修復活動—会話における『スムーズな』トピック推移の形式をめぐって—」 『大阪教育大学紀要第II部門社会科学生活科学』44:1-25。
- 後藤将之 1999 『コミュニケーション論』 中央公論社。
- サーサス・ガーフィンケル他 1995 『日常性の解剖学』 マルジュ社。
- Lave,J.,&Wenger,E. 1991 “*situated learning.Legitimate peripheral participation*” CambridgeUniversity Press (=佐伯胖訳 1993 『状況に埋め込まれた学習』 産業図書)。
- 西坂仰 1997 『相互行為分析という視点』 金子書房。
- 上野直樹・西坂仰 2000 『インタラクション—人工知能と心』 大修館書店。
- 山下晋司 1996 「観光の時間、観光の空間」、『時間と空間の社会学(岩波講座現代社会学6)』 岩波書店:99-116。
- 好井裕明・山田富秋・西坂仰 1999 『会話分析への招待』 世界思想社。
- 不明 不明 『O 焼』(T 陶芸展示館において2000年9月11日入手したパンフレット)。
- 不明 不明 『N 市の旬匠味技地場産品』(N 市観光課において2000年8月2日に入手したパンフレット)。
- 不明 不明 『阿波の焼物 O 焼』(N 市観光課において2000年8月2日に入手)。
- 不明 2001 「素人の陶芸」(<http://www.sikasenbey.or.jp/~nagata/sakutou1.htm> 2001/2/7 に参考)。
- 不明 2001 「寺元陶房」(<http://teramoa.hoops.livedoor.com/tebineri.htm>,2001/2/7 に参考)。

謝辞

このゼミ論を執筆するに当たり、多くの方にご協力を頂きました。ここに感謝の気持ちを込めてお礼を述べたいと思います。撮影協力をしていただいたT 陶器様、本当にありがとうございました。また樫田美雄先生、中村和生氏、その他のみなさん、多くの助言をしていただき、本当に感謝しています。